



正五位勲四等淺野總一郎叙勲ノ件
右謹テ裁可ヲ仰ク

大正十五年八月二十一日

内閣總理大臣若槻禮次郎



内閣



賞勳局第一二一號

内閣 通第ニ〇号

大正五年八月二十一日施行
八月二十一日裁可

大正十五年 七月十九日

内閣書記官長

内閣書記官長



内閣總理大臣

賞勳局總裁



正五位勲四等淺野總一郎叙勲，件
別紙，通議定候條此段允裁ヲ
仰ク

賞勳局

大正十五年七月十四日

賞勳局總裁

書記官

議定官

否

可



叙勳議案

正五位勳四等淺野總一郎

右ハ夙ニ身ヲ海運界ニ投シ明治十六年
共同運輸會社ノ設立ニ關與シ同十九年

賞勳局

淺野田漕部ヲ創設シ明治二十七年戰
役後對外航路ノ開拓擴張ヲ圖ルノ極
メテ急務ナルヲ認メ茲ニ桑港航路開拓
ノ計畫ヲ樹テ同二十九年東洋汽船會社
ヲ創立シ政府ノ補助ヲ受ケテ本航路ノ經
營ニ膺ル當時我海運ハ尚未ク搖籃時代
ヲ脱セズ本航路ノ如キモ殆ント外國船ノ獨占
ニ委セラレ本邦船舶ノ挿入容易ナラサルモノ
アリシカ同人ハ自ラ渡米シテ關係會社ト
ノ提携又ハ荷主其他トノ協調ニ奔走シ更

ニ歐洲ニ渡リテ大形汽船三隻ヲ購入シ香港桑港間ノ定期航路ニ就カシム爾來一面ニハ會社財政上ノ困難ト戰ヒ他面ニハ外國汽船會社トノ競争ニ對抗シツテ益々本航路ノ施設ヲ改善シ更ニ明治三十八年第一船ヲ南米西海岸諸國方面ニ配シテ南米航路ノ開拓ニ著手シ等シク政府命令ノ下ニ漸次業務ノ充實ヲ圖リ以テ今日ニ至ル而シテ其ノ間明治三十七八年戰役ヲ經テ本邦海運ハ一層ノ發

賞勲局

展ヲ遂ケ更ニ歐洲大戰ノ勃發ニ因リ海運界未曾有ノ活況ヲ呈シタルヲ以テ外國ヨリ數隻ノ旅客船ヲ購入シ桑港航路ニ充當シ且ツ新ニ十餘隻ノ貨物船ヲ建造シテ北米方面ニ配シ以テ我航權ノ維持擴張ニ努メ我對米交通貿易ノ發達ニ貢獻シ且ツ加州方面ニ於ケル邦人移殖發展上ニ資シタル所尠カラス其ノ功績顯著ナリト認ム仍テ遞信大臣ノ上奏ヲ勘査直シ勲等ヲ擬議スル

左ノ如シ

敍勲三等授旭日中綬章

賞勲局

正五位勲四等淺野總一郎

右者夙ニ身ヲ海運界ニ投シ明治
十六年共同運輸會社ヲ設立ニ
関与シ同十九年淺野回漕部ヲ
創設シ次ニ海運同盟會ヲ組織シ
テ所謂本邦社外船ノ團結ニ努メ
タルカ明治二十七八年戰役後我國
運ノ進展ニ伴ヒ對外航路ノ開拓
擴張ヲ畧ルノ極メテ急務ナルヲ認

メ茲ニ桑港航路開始ノ計劃ヲ樹
テ今二十九年東洋汽船會社ヲ創
立シ政府ノ補助ヲ受ケテ本航路ノ
經營ニ膺リ對米航運ノ基礎次第
ニ形成セラレタルカ爾來著々其施設
ヲ改善シタルノミナラス更ニ南米西
海岸諸國ニ對スル交通貿易關係
將來益ニ重要ノ度ヲ加フヘキヲ察知
シ明治三十八年第一船ヲ諒方面ニ
配シテ南米航路ノ開拓ニ着手シ等

シク政府命令ノ下ニ漸次業務ノ充
實ヲ蓄リ以テ今日ニ迄ヘリ而シテ其
間三十七八年戦役ヲ経テ本邦海運ハ
一層ノ發展ヲ遂ケ更ニ欧州大戦ノ勃
發ニ因リ海運界ハ未曾有ノ活況
ヲ呈シ我對外航路ノ發達ニ絶好ノ
機會ヲ与ヘタルヲ以テ全社ハ外國ヨ
リ數隻ノ旅客船ヲ購入シテ之ヲ桑
港航路ニ充當シ且新ニ十余隻ノ貨
物船ヲ建造シテ北米方面ニ配シ以
テ我航權ノ維持擴張ニ努メタルノ
ナラズ或ハ聯合興國援助ノ為帝國
政府ニ於テ米國ニ對シ船舶ヲ貸与
スルノ議起ルヤ率先シテ其所有船
二隻ヲ提供シタルカ如キ或ハ米國ノ
鐵材輸出禁止ニ伴ヒ日米兩國
間ニ船鐵交換ノ問題生スルヤ之カ
遂行ニ多大ノ盡力ヲ致シタルカ如キ或
ハ政府カ對獨賠償ノ一部トシテ取
得シタル汽船大洋丸ヲ民間ニ貸下

クルニ方リ郵商兩社ノ如キ之カ引受
ケテ躊躇セルニ拘ラズ敢然之ヲ受ケ
テ北米航路ニ使用シ以テ同航路ニ
一異彩ヲ加ヘタルカ如キ孰シモ本邦
海運ノ為寄与シタル所歟カラス加
之過般米國ニ於ケル新移民法ノ
實施ニ方リ本邦渡米移民ノ急
送ヲ要シタル際進ンテ多數移民ノ
輸送ニ膺リタルカ如キ亦以テ邦家ニ
對スル貢獻ヲ認ムルヲ得ヘレ然レトモ

通信省

同人カ海運ニ從事スルコト四十余年
ノ間、於テ畢生ノ事業トシテ最ニ
心血ヲ注キタルハ前述ノ北米及南米
ノ兩航路ノ經營ニ外ナラス殊ニ柔
港航路開始ノ當時ニ在テハ我海運
ハ尚未タ搖籃時代ヲ脱セスレテ本
航路ノ如キモ殆ト外國船ノ獨占ニ
委セラレ本邦船舶ノ挿入容易ナラ
ザルモノアリシカ同人ハ自ラ渡米シテ
關係會社トノ提携又ハ荷主其他

トノ協調ニ奔走シ更ニ歐州ニ渡リテ
當時本邦ニ於テハ稀有ノ大型六千
噸級船日本丸、香港丸及亞米利加
丸ノ建造ヲ約シ而シテ右三船ハ明治
三十一年末ヨリ全三十二年初ニ於テ
夫ニ香港來港間ノ定期航路ニ就
航シタルカ當時同一航路ニ從事セル
太平洋郵船會社其他ノ使用船
ニ比シ優秀ニシテ來港航路ニ於テ
霸者タルノ名聲ヲ博シタリ尔來
一面ニハ會社財政上ノ困難ト戰ヒ
他面ニハ外國汽船會社トノ競争
ニ對抗シツツ益ニ本航路ノ施設ヲ
改善シ明治三十七年ニハ一萬三千
噸級ノ天洋丸、地洋丸及春洋丸
ノ建造計劃ヲ樹テ同四十一年
乃至四十四年ノ間ニ夫ニ竣工ノ工
本航路ニ編入シタルカ此等ノ汽船ハ
孰シモ太平洋航路ニ於ケル最優
秀ノ旅客船トシテ内外ノ顧客ニ滿

通信省

足ヲ与ヘ加之前記ノ如ク外國ヨリノ
購入船數隻ヲモ増配シテ本航路
ニ一層ノ威力ヲ加ヘ我對米交通貿
易ノ發達ニ貢獻シタルハ勿論加州方
面ニ於ケル邦人ノ移殖發展上ニ
資シタル所亦尠カラズ從來東洋
北米間航路ニ於テ本邦船舶最モ
優秀ナル地歩ヲ占メ太平洋航
路ニ於テ列國間ニ重キヲ爲シタ
ル所以ノモノハ同社ノ力ニ負フ所
洵ニ鮮シトセス尚又同社ノ開拓經
營ニ係ル南米西岸航路ハ本邦及
南米西岸諸國間ニ於ケル唯一
定期航路ニシテ之ニ依リ墨西哥、
秘露及智利諸國トノ貿易ヲ促
進シ且諒地方ニ對スル邦人移住
ノ便宜ニ資シタル所亦尠少ナラザ
ルモノアリ如斯前記西航路ノ開拓
充實ヲ畚リ今ヤ確實ナル航運上
ノ地盤ヲ築キタル所以ノモノハ政

府ノ保護ト時運ノ進展ニ因ルコト勿
論ナリト雖モ同人ノ力ニ負フ所亦
多大ナルモノアルヲ認メサルヘカラス
由來日米航路ニ我對米貿易上
極メテ重要ナル使命ヲ有スルモノ
ナル處該航路ハ從來郵船東洋
商船ニ社ノ經營セル所ニシテ其營
業方針、如キモ亦自ラ異リ其間
統一ヲ缺ケルモノアルヲ免レサリシカ
曩ニ政府ニ於テ本航路ヲ統一セ
ントスルノ計劃ヲ樹テ之カ第一着
手トシテ先フ柔港線ノ施設改善
ヲ企圖スルヤ同人ハ當時東洋汽船
會社社長トシテ克ク政府ノ方針
ニ順應シ進テ其現存施設ヲ日本
郵船會社ニ讓渡シ以テ右兩社ノ
合併ヲ實現セシメ今後ニ於ケル該
航路ノ基礎ノ充實ニ資シタルハ
洵ニ奇特ノ行為ト稱スヘク以上
敘述セル如ク同人カ我國海運界

ニ寄與シタル功績ハ實ニ没スヘカ
ラサルモノ有之仍テ此際特ニ相當
勲等陞叙セシメラシ度別紙調
書ヲ具シ謹テ奏ス

大正十五年六月十九日

逋信大臣安達謙藏



逋信省

(姓名ニハ必ズ「フリカナ」ヲ附スベシ)

位 動 爵
博 士

名 氏

浅野 總一郎

印 實

生年月日

嘉永元年三月十日

産 地

舊 氏 名

府縣族籍

東京市深川區清住町一番地

原 籍

東京市芝區田町五丁目十六番地

現住所

年 號

任 免 賞 罰 其 他 事 項

官

廳

嘉永元年

宿山縣水見郡藤田村醫師浅野泰順

ノ者男トシテ生ル

安政二年

儒者西井快安、塾、入り漢学ヲ修ム

明治三年

志ヲ抱テ東京ニ上ル

々 六 年

横濱市住吉町ニ新炭及石炭販賣商ヲ管ム

々 十 四 年

工務省ヨリ深川セメント工場、貸

履 歷

用 紙

遞 信 省

明治十年

セメント工場、拂下ヲ受ク

々 十 八 年

共同運輸株式会社ヲ創立ス

々 十 九 年

磐城炭礦株式会社ヲ創立ス

々 二 十 年

々志ト共ニ東京瓦斯株式会社ヲ創立ス

々 二 十 一 年

浅野田沼藩邸ヲ創立ス

々 二 十 三 年

々志ト共ニ東京製網株式会社ヲ創立ス

々 二 十 五 年

々志ト共ニ札幌啤酒株式会社ヲ創立ス

々 二 十 六 年

浅野石油部ヲ創設ス

々 廿 九 年

東洋汽船株式会社ヲ創立ス

々 卅 一 年

北越石油株式会社ヲ創立ス

々 卅 二 年

浅野セメント合資会社ヲ創立ス

々 卅 四 年

從五位ニ叙セラル

々 卅 五 年

茨城探炭株式会社ヲ創立ス

北越石油株式会社、寶田石油

大正九年	株式會社ニ合併ス 淺野石材工業株式會社ヲ創立ス 勲五等ノ叙セラレ双光旭日章ヲ授ケラル	石狩石炭株式會社ヲ創立ス	東西石油株式會社ヲ創立ス	南北石油株式會社ヲ創立シ東西石油株式會社ヲ合併ス	南北石油株式會社ハ寶田石油株式會社ニ合併ス	臺灣地所建物株式會社ヲ創立ス	基隆地所建物株式會社ヲ創立ス	同志ト共ニ櫻山金礦株式會社ヲ創立ス	淺野製材株式會社ヲ創立ス	日本石膏株式會社ヲ創立ス	大正九年 履歴 用紙	遞信省
大正八年	株式會社ニ合併ス											
大正七年												
大正六年												
大正五年												
大正四年												
大正三年												
大正二年												
大正元年												

	社ヲ創立ス 株式会社日本晝夜銀行ヲ引受 經營ス	
大正六年	大日本鐵業株式会社ヲ引受經營ス 東洋草薙株式会社ヲ創立ス 中央製鐵株式会社ヲ創立ス 新日本石油株式会社ヲ創立ス 鐵業株式会社：合併ス 合志ト共ニ株式会社大島製鐵所 ヲ創立ス	
大正七年	淺野物産株式会社ヲ創立ス 株式会社淺野製鐵所ヲ創立ス 朝鮮秩山株式会社ヲ創立ス 淺野左族株式会社ヲ創立ス 神合資会社ヲ合併ス 株式会社淺野小倉製鐵所ヲ創立ス 日本鐵鐵株式会社ヲ引受經營ス	
大正八年	合志ト共ニ國際汽船株式会社ヲ創 立ス 淺野自動機製造株式会社ヲ創 立ス 庄川水力電気株式会社ヲ創立ス 關東水力電気株式会社ヲ創立ス 金身奇附ノ廉ヲ以テ賞勳勲章 哉ヨリ本益ヲ下賜サル 前年米價騰貴ニ際シ奇附金ニ 爲勅宣ノ緬授褒賞ヲ賜ハル 淺野綜合中学校ヲ創設ス 日本鑄造株式会社ヲ創立ス 株式会社淺野造船所ト株式会社 淺野製鐵所トヲ合併シ新ニ株 東洋鐵管之株式会社ヲ創立シ	遞 信 省
大正九年		

	鶴見堤築株式会社ヲ合併ス 京濱運河株式会社ヲ引受經營ス 關東運輸株式会社ヲ創立ス 臺灣地所建物株式会社ニテ基隆 地所建物株式会社ヲ合併ス 鶴見木之株式会社ヲ創立ス 信越木材株式会社ヲ創立ス 富士製鋼株式会社經營ノ銜當ル 大正四年乃至九年事件ノ切、依リ 勲四等瑞寶章ヲ授ケラル	
大正十年 履歴 用紙	日本カーリット株式会社ヲ創立ス 鶴見炭工株式会社ヲ創立ス 内外石油株式会社ヲ創立ス 神奈川コークス株式会社ヲ引受經營ス 鶴見不二株式会社ニテ鶴見炭工 株式会社ヲ合併ス 株式会社ヲ合併ス 横濱港向ニ大船渠及船舶修理工 場ヲ建設ス 関東大震災救済金壹百万圓ヲ公共 ニ寄附ス 日本カーリット株式会社及浅野ス レート株式会社 ^(合併) 株式会社ニ合併 ス 瑞共国王ヨリ「ラ、クロア、ド、コンマン ダアル、ド、ブザ」勲賞ヲ贈與セラル 鶴見貯港鐵道株式会社ヲ創立ス 全国數十方有志ニヨリ神奈川縣 鶴見町浅野綜合中学校内及郷 里ニ奇像建設セラル 木津川セメント株式会社ヲ浅野 セメント株式会社ニ合併ス	遞 信 省
大正十三年		

合十四年

浅野スレート販賣株式会社ヲ
創立ス
浅野造船所内ニ熔鋼爐ヲ
建設ス

履歴用紙

遞信省

淺野總一郎氏事業經歷

大正十五年二月作成

一、東洋汽船株式會社ノ沿革

淺野氏汽船營業ノ發端

淺野氏カ汽船營業ノ志望ヲ樹テタルハ明治十年ノ西南戰爭ニ始マレリ、後續運ノ熟スルヲ俟チテ益田孝、澁澤喜作、藤井三吉、伊藤高吉、宮地助三部、ノ緒氏ト共ニ品川彌次郎、榎本武揚氏等ノ後援ヲ得テ共同運輸會社ヲ創立セリ、之レ明治十六年四月ナリ
當時唯一ノ汽船會社タリシ岩崎汽船部トノ競争日ヲ逐フテ激烈ヲ加フルニ至リタルヲ以テ政府ノ仲裁トナリ、明治十八年十月兩社合併ス、之レ今日ノ日本郵船株式會社ナリ

明治十九年福達船ベロナ號ヲ買收シ日ノ出丸ト改メ淺野回漕部ヲ開業ス後、金澤丸、萬國丸、鶴丸等ヲ所有スルニ至ル

明治二十年頃、社外船主廣海仁三部、馬場道久氏等ヲ糾合シテ海運同盟會ヲ組織シ委員長ニ就任ス、日清戰爭ノ際ハ同盟會ニ於テ八萬噸ヲ所有シ、御用船ヲ提供シテ當局ノ御満足ヲ賺ヒ得タリ
明治二十八年、淺野回漕部所有船全部ヲ土佐汽船會社ニ賣却シ東洋汽船會社ノ創立ニ着手ス、之レ淺野氏ノ海外航路經營ニ從事スル發端ナリ

會社ノ創立

明治二十六年十一月、印度人ゼーエヌ、ターター氏來朝シ、淺野總一郎氏ニ當時ビーオー會社獨占ノ印度航路ニ對シ郵船航路ノ開拓ヲ望ムス、淺野氏ハ當時海外航路開拓ヲ希望セル際ナリシヲ以テ直チニ之レカ計劃ニ賛成シ澁澤榮一氏ニ協リシ處、印度航路ハ日本郵船會社ヲシテ開拓セシムルカ便多カルヘシトノ御意見ニ從

ト、同社ノ企劃ニ委ネタリ之レ我國船舶ノ印度航路開拓ノ動因ナリ、然レトモ當時邦船ノ海外航路ハ權カニ日本海沿岸ノ數線ニ過キス、政府ニ於テモ遠洋航海獎勵法並ニ造船獎勵法等ヲ議會ニ通過セシメシ際ナリシカハ淺野氏ハ桑港航路開拓ノ目的ヲ樹ツルニ至レリ、斯クテ東洋汽船會社ハ明治二十九年七月、資本金六百五拾萬圓ヲ以テ成立セリ

桑港航路開拓

淺野氏ノ目的航路ハ桑港、香港間ノ連絡航海ニシテ此航路ハ當時ピーオー及オーオー兩汽船會社ノ經營スル處ナリシカ業ニ日本郵船會社ニ於テ航路割込ノ計劃ヲ樹テ目的ヲ達シ得サリシ問題ノ航路ナレハ淺野氏ハ自ラ二十九年渡米シハンチングトン氏ト折衝數次ニ及ヒ漸ク目的ヲ達ス、之レ實ニ我海運史上特筆スヘキ事項ナリ

淺野氏直チニ渡英、最新式六千二百噸、速力十八節ノ貨客船三艘ノ建造ヲ註文シ日本丸、香港、亞米利加丸ト命名ス、三船ハ明治三十一年末ヨリ同三十二年初ニ本邦ニ廻航シテ航海獎勵法ノ規定ニ合格シ香港ニ於テ定期表ニ入り明治三十三年ヨリ向フ十ヶ年間年額百八萬圓宛ノ補助金ヲ支給サル、コト、ナリテ航海ニ從事ス、此三船ハ當時設備其他ノ點ニ於テ太平洋上最優秀船タルノ地位ヲ占ム

マニラ航路開拓

明治三十三年、桑港航路ノ豫備船トシテロヒラ丸口セツタ丸ノ二船ヲ購入ス

當時香港マニラ間航路ハ三外國船ニヨリテ經營セラレタリシカ、貨客ノ取扱ニ非難多ク運賃亦高率ナリシニ鑑ミ、東洋汽船ハ右二

船ヲ租船シテ新ニ此香港マニラ航路ヲ開拓ス

開拓船務

明治三十七年、日露戦争開始トナルヤ政府ノ命ニヨリ直チニ所有船全部ヲ租用船ニ提供スルコトニ決ス、日本丸香港丸ハ同年一月亞米利加丸口ヒラ丸口セツク丸ハ同年二月政府ニ引渡シタリ、此ノ爲メ香港、マニラニ航路共戦時中一時廢航ノ止ムナキニ至ル

南米航路開拓

淺野氏ハ東洋ト南米トノ貿易關係カ將來重要ナルヘキヲ察シ明治三十四年ニ社員ヲ派シ更ニ同三十七年ニ重役ヲ派シテ實情ヲ調査セシメ三十八年十二月ダレンブアイダ號ヲ備船シテ南米航路ヲ開拓ス、之レ實ニ邦船ノ南米航路開拓ノ創始ナリ、此航路ハ最初多大ノ損失ナリシモ益々擴張ニ努メ明治四十二年政府ノ命令航路トナリ、大正二年二月一回本邦發ノ定期航路トナセリ

三大船建造

明治四十年頃ヨリ太平洋郵船會社ハ一萬九千噸ノ巨船四艘大北鐵道會社ハ二萬噸ノ巨船二艘ヲ太平洋航路ニ配船セリ、淺野氏此ニ倣ミ一萬三千噸速力二十一節ノ新船三艘ヲ建造スヘク主唱シ遂ニ三菱造船所ニ注文ス

第一船天洋丸ハ四十一年五月、第二船地洋丸ハ同年十一月、第三船春洋丸ハ四十四年二月竣工シ桑港航路ニ就航セリ右三船ハ兼レモ優秀船トシテ内外ノ顧客ニ非常ナル満足ヲ與ヘ得タリ

然ルニ右新船竣工當時ハ日露戦後ノ瘡痍甚タシク我經濟界ハ疲弊困憊ノ折柄トテ船價未幾八百萬圓ノ資金調達ニ苦シミ、且ツ海運界不況ノ爲メ營業損百餘萬圓ヲ計上セリ、此時ニ際シ故安田善次

郎氏ハ八百萬圓ノ社債單獨引受ケテ承諾サレ、淺野氏亦田町ノ自
宅ニ株主一同ヲ招集シテ應接大イニ努ムル處アリ、東洋汽船トシ
テハ正ニ内幕外患ノ時代ナリシカ漸ク此難境ヲ切抜ケ得タリ

歐洲大戦ト當社

歐洲大戦ノ勃發スルヤ船舶ノ世界的缺乏ヲ來シ海運界ハ異常ナル
活氣ヲ加ヘ來タレリ當社ハ大正四年ベルシヤ丸ヲ購入シテ船舶ノ
缺乏ヲ補フ處アリシカ、更ニ大正四年末、太平洋郵船會社カ米國
海員法ノ同國議會通過ヨリ太平洋航路ノ船舶全部ヲ撤退スルコト
、ナリタルヲ以テ大正五年同社從來使用ノコレヤ、サイペリヤノ
二船ヲモ買収セリ之等三船ハ大正五年三月三十一日香港沖ニ沈没
セル地洋丸ノ代船トシテ桑港航路ニ配船セリ、尙此時期ニ於テ急
激ナル船舶ノ需要ニ應スル爲メ貨物船ヲ備船シ桑港東洋間ノ航路
ヲ營ミタリ

大正七年六月政府ノ交渉ニ依リ勝洋丸、波斯丸ノ二艘ヲ米國陸軍
輸送ノタメ米國政府ヘ贈船トシテ提供セリ

當社ノ増資

明治四十一年資本金ヲ倍加シテ千參百萬圓トナセシカ大正五年ニ
至リ更ニ參千貳百五拾萬圓（拂込千七百七拾八萬五千圓）ニ増加ス

新船建造ト新航路開始

歐洲大戦ノ經驗ニ鑑ミ當社ハ新船建造ノ必要ヲ認メ大正八年南米
航路用九千噸級貨客船三艘八千八百噸級貨物船九艘合計十二艘ノ
建造ニ着手ス此新貨物船ノ竣工ヲ始ムルヤ大正九年世界一週航路
即チパナマ經由本邦經南米航路（ニユーオウルリンス及ガルフポート
寄港）ヲ開始シ同年東洋北米ポートランド航路ヲ開始セリ

太平洋丸ノ運航引受

大正十年歐洲大戦ノ賠償船トシテ日本政府ハ獨逸政府ヨリ一萬四千噸ノ巨船キヤツプファイニスタール號ヲ取得ス、海運界不況ノ折柄ナリシモ之レカ運航ヲ引受ケ桑港航路ニ配船セリ

瓜哇航路開始

大正十一年十一月、神戸瓜哇間ノ定期航路ヲ開始シ北米線ヨリ波斯丸ヲ撤退シテ之レニ就航セシメタルカ大正十三年初ニ至リ之レヲ廢航シテ同船ヲ横濱ニ變船セリ

移民急送

大正十三年七月一日ヨリ米國新移民法ノ實施確定トナルヤ、鹽竈ノ處置トシテ政府ノ命ニヨリ波斯丸ヲ變裝シテ桑港ニ直航セシメ移民者並ニ政府ノ満足ヲ贏チ得タリ

船客接待

淺野氏ハ明治四十二年以來用町ノ自邸ニ東洋汽船ニヨリ來朝スル船客及外國知名ノ觀光團ヲ招待シ國情ノ紹介ニ努ム、其人員十三萬人ニ及フ

雜誌「ジャパン」刊行

桑港ニ於テ月刊雜誌「ジャパン」ヲ發刊シ我國論及國情ノ紹介ニ努ム

所有船一覽

船名	噸數	最速力	航路
天洋丸	一三四〇一・六六	二〇・三六	北米航路桑港線
春洋丸	一三〇三九・四八	二〇・二三	同
大洋丸	一四四五七・五〇	一六・六一	同

(政府委託船)

これや丸	一、八〇九・九六	一八・二九	香港
さいべりや丸	一、七九〇・一一	一八・八六	同
樂洋丸	九四一・八・五七	一五・九三	南米航路西岸線
安洋丸	九二五六・五二	一五・五〇	同
恩洋丸	八六〇三・五五	一四・五五	同
銀洋丸	八六〇〇・一八	一四・七四	同
銀洋丸	九〇四九・一三	一四・二一	油 糖 船
靜洋丸	六五五〇・一〇	一三・三六	不定期貨物船
旺洋丸	五六七〇・九六	一二・九三	同
美洋丸	五四七九・五五	一二・〇五	同
香洋丸	五四七一・四〇	一四・五三	同
福洋丸	五四六三・二八	一三・七〇	同
朝洋丸	五四五四・四四	一四・四八	不定期貨物船
巴洋丸	五四四五・七八	一四・五一	同
慶洋丸	五四四五・七八	一四・七一	同
明洋丸	五四三四・六一	一三・七一	同
計	一五九八四二・五六		
洋丸	五四四五・〇〇	一四・〇〇	
(總計中)			

郵船東洋合併理由

歐洲戰後、米國船ハ桑港及沙市兩航路ニ二萬噸乃至三萬噸級ノ優秀船ヲ配船シ來リタルヲ以テ我亦之レカ對抗上優秀船建造ノ必要迫マレルモ東洋汽船ハ財政上實現至難ニ付キ子爵海峽第一、井上準之助、男爵海峽之助ノ三氏仲介ノ下ニ日本郵船代ツテ之レカ實現ヲ期スコト、ナレリ之レ東洋汽船ノ桑港、南米二航路ヲ郵船ニ

合併スル所以ナリ

政府ニ於テハ財政影響ノ折柄、郵船並東洋兩社ノ希望スル金額ノ補助金ハ支出シ難キモ漸ク貳百八拾六萬圓ヲ捻出シテ優秀船建造ヲ獎勵サル、運ヒニ到達セリ

以上ハ東洋汽船株式會社ノ沿革史ナルカ更ニ淺野氏ノ事業界ニ於ケル經歷ヲ略記シ左ニ添付スヘシ

ニセメント事業

工部省ハ明治六年地ヲ深川清住町ニトシ、始メテセメント工場ヲ
興業セリ、政府ハ貳拾壹萬圓ノ資金ヲ投シタルモ文明未開ニシテ
遂ニ經營至難ニ墮ル、明治十四年七月、淺野氏之レカ貸下ヲ受ク
明治十六年四月、セメント業將來ノ燭光ヲ認メ得タレハ淺澤榮一
氏保證ノ下ニ貳貳萬五千圓ニテ拂下ケ、名實共ニ自己ノ所有トナ
ス、之レ今日ノ淺野セメント株式会社ナリ

淺野セメント工場拂下當時ノ製産額ハ一ヶ月八百餘内外ナリシカ
セメント事業ハ社會文化ト共ニ年々發展ヲ遂ケ、今日ニテハ東京
大阪、川崎、門司、臺灣、北海道ノ六工場ヲ合シテ一ヶ月僅ニ壹
百萬餘以上ノ製造能力ヲ有スルニ至リ、全國セメント總製産額ノ
約六割ヲ占ムルニ至レリ、資本金又五千六百參拾壹萬圓ノ巨額ニ

達ス、

三 磐城炭礦ノ開發ト常磐線

明治十年、西東戰爭勃發スルヤ、九州炭社經ノ儘メ京濱燃料界發
成サル京濱附近ノ炭礦開發ノ志望此時ニ兆ス、明治十六年漸ク志
ヲ得、淺澤榮一、益田孝、須藤時一郎、沼田守一、渡邊治右衛門
氏等ト協リ資本金四萬圓ノ磐城炭礦社ヲ創立ス、之レ今日ノ磐城
炭礦株式会社ナリ、同社今日ノ現在資本金ハ九百萬圓ナリ、
明治二十一年、磐城炭ノ輸送ニ動機ヲ發シ淺澤榮一氏ト共ニ平、
上野關ノ鐵道布設ノ計劃ヲ樹ツ、時ノ鐵道總長井上馨氏ノ仲介ニ
依リ此計劃ヲ日本鐵道ニ譲渡シタルモ願レハ之レ今日ノ常磐線布
設ノ動因ナリシナリ

四 瓦新事業

明治十八年九月、東京瓦斯局委員ニ任命サル、

淺野氏ハ東京瓦斯會社カ市營ノ瓦斯局時代ヨリ其經營ニ參與シ、
明治二十七年、株式會社トナルヤ推サレテ監査役ニ就任シ、尙三
十一年七月ノ總會ニハ取締役ニ當選セリ、取締役在任中ノ大正二
年ニ石狩石炭會社ト燃料炭兩七圓參拾錢ノ五拾ケ年契約ヲ締結シ
世人ヲ驚愕セシメタリ、明治十八年瓦斯局委員就任ヨリ三十年目
ノ大正三年七月ニ辭任ス、

淺野氏ハ大正十一年、山本唯三郎氏ヨリ神奈川コークス製造所ヲ
買收シ神奈川コークス株式會社ヲ創立セリ、同社ノ排出瓦斯ハ日
下東京瓦斯會社ニ供給シツ、アリ

五 水力電氣事業

明治二十五年、宇治川ノ水利ニ着眼シ、日本最初ノダム式水電ノ
計劃ヲ樹ツ、然ルニ同一川路ニ於テ中橋徳五郎氏等ノ計劃アリタ
ルヲ以テ轟田徳三郎、大倉喜八郎兩氏仲介トナリ、水利權讓渡ノ
交渉ヲ屢ク、數次交渉ノ結果、淺野氏計劃ノ工事ハ中橋氏等ニ於
テ第二期工事トシテ必ス着手スヘキ約定ノ下ニ遂ニ讓渡ニ決ス、
之レ今日ノ宇治川水力電氣株式會社ナリ

淺野氏ハ又大正八年ニ庄川水力電氣株式會社、關東水力電氣株式
會社ノ二社ヲ創立セリ、前者ハ富山縣ノ庄川ニ於テ、後者ハ利根
川及吾妻川ニ於テ水力ノ發電ヲ計劃シ、目下孰レモ企工中ニ屬セ
リ

六 埋立事業

明治二十九年、歐米ノ海陸設備ノ完備セル狀ヲ目撃セシ以來、潛
カニ之レカ計劃ヲ怠ラサリシカ明治三十七年始メテ鶴見海岸百五

拾萬坪ノ埋立計劃ヲ發表セリ、之レ今日ノ東京灣埋立株式會社ナリ、同社ハ今日千貳百五拾萬圓ノ資本ヲ擁シ目下盛ンニ工事進捗中ナルカ埋立完成地ハ新興工業地トシテ今大工場軒ヲ垂フルノ盛況ナリ

尙此餘見埋立地ニ聯絡シテ芝浦海岸ニ向ツテ運河ヲ開鑿セントスル京濱運河會社ノ計劃ヲ有スルノ外、小倉、釜山等ニ新埋立ノ計劃ヲ樹テタリ且ツテハ明治四十年ニ安田善次郎氏ト協リ工費千七百萬圓ノ東京灣築港ノ築造ヲ計劃シ東京府及東京市ニ之レカ認可ヲ申請セシコトアルモ之ハ遂ニ志ヲ得スシテ終レリ

七 淺野造船所ノ創業

大正五年四月、資本金千五百拾萬圓ヲ以テ株式會社淺野造船所ヲ創立セリ、同五月海面ノ埋立ニ着手シ晝夜兼行ニテ工程ヲ進メ埋立着手一年ニシテ第一船壹萬壹千五百噸ノ白鹿丸ヲ進水シ以下引續キ四隻同座六千噸、第二年日ニハ八隻四萬七千七百四十噸、第三年日ニハ十二隻拾壹萬八千百貳拾噸ヲ進水シテ本邦造船界ニ驚異的數字ヲ示セリ、内六萬噸ハ聯合與國ニ提供ス、之ハ米國トノ船隻交換條件ニ基ケリ、淺野造船所ハ今日總資本金五千萬圓ノ會社トナリ、一ヶ年最大造船能力貳拾萬噸ニ達シ造船臺拾臺ノ中二臺ハ三萬噸級ノ艦船ヲ建造シ得ル設備ヲ完備セリ

尙大正八年十一月ヨリ横濱港内山下町ニ三萬噸級ノ艦船ヲ入渠シ得ル船渠及修理工場ノ建設ニ着手セリ

大正拾貳年^末月ニハ鋼鐵自給ノ計劃ヲ樹テ淺野造船所内ニ熔鑪爐ヲ起工シ、大正十四年末竣工ス

八 淺野綜合中學校創設

米國領地界ニ重キヲナスエルバート、エツチ、ゲイリー氏ノ官業
 徒弟養成ニ關スル主唱ニ共鳴シ、大正九年金壹百萬圓ヲ寄附シ財
 團法人淺野綜合中學校ヲ組織ス、之レカ校舎ヲ蕪濱市子安町ニ建
 設ス

九現在事業ノ一覽

淺野國策株式會社	(資本三五〇〇萬圓)
淺野セメント株式會社	(五六三一萬圓)
東洋汽船株式會社	(三二五〇萬圓)
磐城炭礦株式會社	(九〇〇萬圓)
淺野小倉製鋼所	(一、五〇〇萬圓)
東京灣埋立株式會社	(一、二五〇萬圓)
株式會社淺野造船所	(五〇〇〇萬圓)
庄川水力電氣株式會社	(一、〇〇〇萬圓)
關東水力電氣株式會社	(一、七〇〇萬圓)
大日本鑛業株式會社	(五〇〇萬圓)
京濱運河株式會社	(五〇〇萬圓)
内外石油株式會社	(七五〇萬圓)
沖電氣株式會社	(二五〇萬圓)
淺野物産株式會社	(一〇〇萬圓)
淺野石材工業株式會社	(一〇〇萬圓)
神奈川コークス株式會社	(一五〇萬圓)
臺灣地所建物株式會社	(一二〇萬圓)
日本鐵道株式會社	(一五〇萬圓)
日本鑛造株式會社	(一〇〇萬圓)

鶴見木工株式會社	()	一一〇萬圓
信越木材株式會社	()	一〇〇萬圓
北秋木材株式會社	()	七〇萬圓
日本石膏株式會社	()	一五萬圓
(以上各社取締役社長トシテ直營ス)		
布吐夜行	(資本	四〇萬圓)
(以上取締役頭取トシテ直營ス)		
株式會社帝國ホテル	(資本	六〇〇萬圓)
日支炭礦汽船株式會社	()	三〇〇萬圓
中央製鐵株式會社	()	一〇〇萬圓
株式會社大島製鋼所	()	六〇〇萬圓
朝鮮鐵山株式會社	()	三〇〇萬圓
關東運輸株式會社	()	一五〇萬圓
淺野スレート販賣株式會社	()	五〇萬圓
(以上各社相談役トシテ關與ス)		
10. 備考		
大正十三年、經營事業ノ從業員並ニ關係者貳拾五萬人ヨリ募集 ヲ斷ラレ之レカ建設地タル淺野綜合中學校々庭及郷里富山縣永 見郡赤田村ニ除幕式ヲ舉行ス、		
11. 位階、其他		
明治貳拾年拾貳月	銀製黃綬褒章ヲ賜ハル	
同 貳拾八年拾貳月	褒章ヲ賜ハル	
同 卅二年 九月	從五位ニ敍サル	
同 卅九年 四月	勳五等雙光旭日章ヲ賜ハル	

第二十七號

大正四年十一月	正五位ニ叙サル	
同 四年十一月	大勳章ヲ賜ハル	
同 八年十一月	紺綬褒章ヲ賜ハル	
同 九年十一月	勳四等瑞寶章ヲ賜ハル	
同十三年一月	瑞典國皇帝陛下ヨリコンマンドールワザ勳章ヲ賜ハル	
同十三年七月	右ニ付日本帝國外國勳章佩用免許證ヲ受領ス	
一、二、金銀木杯、其他		
金杯ヲ賜ハルコト	五回	
銀杯ヲ賜ハルコト	十七回	
木杯ヲ賜ハルコト	四十回	
其他	二十八回	
一三、寄附		
明治三十七年	帝國軍人後援會	一〇〇〇〇圓
大正五年	明治神宮	一〇〇〇〇圓
大正五年	早稻田大學	一〇〇〇〇圓
同	濟生會	五〇〇〇〇圓
大正六年	東京市養育院	一〇〇〇〇圓
同	聯合國赤病兵罹災者慰問會	四〇〇〇〇圓
同	理化學研究所	三〇〇〇〇圓
同	東京風水害救濟會	一五〇〇〇圓
同	惠修大學	一〇〇〇〇圓
大正七年	修養園	一〇〇〇〇圓

第三十七頁

大正七年	摩西米會金トシテ東京府廳及芝區役所	五〇〇〇〇圓
同	聯合國聯關係會	一〇〇〇〇圓
同	基督教青年會	一〇〇〇〇圓
同	慶應義塾醫科大學	一〇〇〇〇圓
同	布疋日本人會慈惠病院	一〇〇〇〇圓
同	香港日本人小學校	一〇〇〇〇圓
同	神奈川縣町田村小學校	三〇〇〇〇圓
同	續須賀工廠共濟病院	一〇〇〇〇圓
大正八年	東京商工獎勵會	三〇〇〇〇圓
同	富山商船學校	一一三八〇〇圓
同	道路改良會	一〇〇〇〇圓
同	神奈川縣救濟協會	一〇〇〇〇〇圓
大正八年	水産救濟會	一〇〇〇〇圓
大正九年	淺野綜合中學校	一〇〇〇〇〇圓
同	勞資協進會	二〇〇〇〇〇圓
大正一〇年	新島高等商業學校	一〇〇〇〇〇圓
大正一二年	早稻田大學講堂建築費	一九五〇〇圓
同	深川青年會	八〇〇〇〇圓
大正一四年	震災罹災者救助資金	一〇〇〇〇〇〇圓
(以上ノ外)		
自明治二八年	寄附金三三五計	七九〇八四六圓
至大正一四年		
總合計		三六九九一四六圓

(C) 東京大学出版部

325

賞勳局



賞勳第二〇

官秘甲第一五〇五號

大正十五年六月十九日

逋信大臣安達謙藏



内閣總理大臣若槻禮次郎殿

別紙淺野總一郎特別勲等
進叙、件上奏書進達ス

大正十五年六月廿貳日